



# 筑紫女学園大学リポジット

The Meaning of pratīyasamutpāda in the  
Vyākhyāyukti, Pratīyasamutpādavyākhyā and  
Paramatthamañjūsā.

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2014-05-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 楠本, 信道, KUSUMOTO, Nobumichi<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/294">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/294</a>               |

『釈軌論』・『縁起経釈』・『第一義宝函』における  
縁起の語義解釈

楠 本 信 道

The Meaning of *pratītyasamutpāda* in the *Vyākhyāyukti*,  
*Pratītyasamutpādavyākhyā* and *Paramatthamañjūsā*.

Nobumichi KUSUMOTO

I. 問題の所在

Vasubandhu(世親: ca. 400)は、*Abhidharmakośabhāṣya* (『俱舍論』以下 AKBh)において、'pratītyasamutpāda'(縁起)の語義解釈を行っているが、類似した議論が、Bhāviveka (清弁: ca. 490~570)の *Prajñāpradīpamūlamadhyamakavṛtti* (以下 PP)や、Candrakīrti(月称: ca. 600~650)の *Prasannapadā* (以下 PrP)でも展開されていることはあまりにも有名である<sup>1</sup>。「北伝アビダルマ」における Vasubandhu の縁起の語義解釈は、中観派に属す Bhāviveka や Candrakīrti の思想にさえも少なからず影響を与えたと考えられる。

一方、「南伝アビダルマ」の大寺派においては、Buddhaghosa(仏音: ca. ~420~430~)が、*Visuddhimagga*(以下 Vis: ca. ~429)をあらわし、その Vis に対して、Dhammapāla(護法: ca. 5~6C)が *Paramatthamañjūsā* (『第一義宝函』, 以下 Pm) という復註をなしたことが知られている<sup>2</sup>。そして、Buddhaghosa も 'paṭiccasamuppāda' (縁起)の語義解釈を Vis で行ない、それに対して、Dhammapāla が Pm で詳細な復註を与えている。

Buddhaghosa と Dhammapāla が、'paṭiccasamuppāda' という語をどのように解釈したのかということについては、浪花 [1991a, 1991b] が、すでに詳細を明らかにしている<sup>3</sup>。だが、Buddhaghosa と Dhammapāla の縁起解釈が「北伝アビダルマとどのように関わりうるのか」ということについては、いまだ明らかにされていないと思われる。

現時点ではまだ単なる想像でしかないが、Buddhaghosa と Dhammapāla は、Vasubandhu の

縁起解釈を知っていたのではないかと筆者には思われる。そして、もし彼らが、Vasubandhu の縁起解釈を参照していたとすれば、Buddhaghosa が参照しているのは表面上 AKBh のように見受けられるのだが、Dhammapāla が参照しているのは AKBh なのではない。Pm の詳細な議論を見ると、Dhammapāla は、AKBh ではなく、AKBh より後の Vasubandhu の作品である、*Vyākhyāyukti* (『釈軌論』以下 VyY)、あるいは *Pratītyasamutpādavyākhyā* (『縁起経釈』以下 PSVy) を参照した上で、Pm の縁起解釈を行っているように見受けられるのである。

本稿では、Vis と Pm 及び VyY と PSVy に展開される縁起解釈の議論に共通する「喩例」に着目することによって、Buddhaghosa や Dhammapāla が Vasubandhu の作品を参照した可能性について考察したい。さらに、これらの文献を比較研究することによって、ほぼ蔵訳しか残されていない VyY、PSVy<sup>4</sup>、及び Sthiramati (安慧: ca. 6C.) の *Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā-tattvārtha* (以下 AKTA)、Pūrṇavardhana (満増: 6C.) の *Abhidharmakośaṭīkālakṣaṇānūsārīṇī* (以下 AKLA) の議論の一部を、Pāli 文献によって還梵想定することが可能であることを提示したい。

なお、Pm の議論は大変詳細であるため、今回は個々の議論の内容については深くは立ち入らず、「喩例」のみに着目して見ていくことにしたい。

## II. 縁起の語義解釈に関する喩例

さて、以下より、テキストにおける喩例の検討に入っていくことにする。

### II-1. Vis と Pm における喩例

まず、Vis と Pm における喩例について見ていきたい。ただし、Pm の議論は大変複雑で長いので、以下では、あらかじめ VyY 及び PSVy と重複する喩例だけを参照するとどめる。Vis と Pm の議論の全貌については、上述の浪花 [1991a, 1991b] を参照されたい。

#### II-1-1. Vis における喩例

まず、Vis の議論から見ていこう。

Vis p. 519, l. 34–p. 520, l. 6: saddabhedato ti paṭiccasaddo ca pan' āyaṃ samāne [p.520] kattari pubbakāle payujjamāno atthasiddhikaro hoti. seyyathidaṃ: cakkhuñ ca paṭicca rūpe ca uppajjati cakkhuvīññāṇaṃ ti. idha pana bhāvasādhanaena uppādasaddena saddhiṃ payujjamāno samānassa, kattu abhāvato, saddabhedam gacchati, na ca kiñci attham sādhetī ti saddabhedato pi na uppādamattam paṭiccasamuppādo ti.

「語 [の法則] に合わないから」について。さらにこの 'paṭicca' という語は過去時における同一の行為者と結び付く場合に、意味の成就をなすのである。例えば「眼と諸色に到達して (pratītya)、眼識が生ずる」というように。しかしここで 'bhāva' (行為) の意味

で実現された語である 'uppāda' という語といっしょに結び付く場合に、同一の行為者は存在しないから、語 [の法則] に合わないことになり、如何なる意味も成立しない。したがって、語 [の法則] に合わないから、'paṭīccasamuppāda' とは生ずることのみではない、というように。

一見わかりにくい議論だが、浪花 [1991b: 8] によれば、この議論のポイントは「paṭīcca という gerund(連続体)が uppāda(生)という名詞とは結び付かない」ということにあるという。つまり、これは、gerund 形の動詞と名詞とを結びつけて複合語をなしている 'paṭīccasamuppāda' という語形は文法的におかしい、という内容の議論なのである。こういった議論は、AKBh では全く問題にされない。だが、「paṭīcca' という語は過去時における同一の行為者と結び付く場合に、意味の成就をなす」という Vis の言及は、Pāṇini 3.4.21 "samānakarṭṛkayoḥ pūrvakāle" という文法学派の規定を意識したものである。そして、大変おもしろいことに、この Pāṇini 3.4.21 という規則については、AKBh でも次のように問題になっているのである。

AKBh p. 138, ll. 3-5: na yukta eṣa padārthaḥ / kiṃ kāraṇam / ekasya hi karttur dvayoḥ kriyayoḥ pūrvakālāyāṃ kriyāyāṃ ktvāvidhir bhavati / tadyathā snātvā bhūṅkta iti /

【文法学派】['pratītyasamutpāda' という] 語のこのような意味は妥当性を持たない。なぜか。なぜなら、行為主体を同じくする二つの行為のうち、先行時に[起こる]行為[を表す動詞語根の後]に[kṛt 接辞] Ktvā が導入されると規定されているからである。例えば、「沐浴した後に食事する」というように。

AKBh の議論の詳細については、楠本 [2007: 128-129] に譲るが、Pāṇini 3.4.21 という規則のもとに、両者とも縁起解釈の議論を展開していることがわかる。まず、これが第一の類似点である。

さらに、第二の類似点が以下である。上述の Vis において、「眼と諸色に到達して(pratītya)、眼識が生ずる」という経典が言及されているが、同じ経典が AKBh でも言及されている<sup>5</sup>。

AKBh p. 138, ll. 21-24: anye punar asya codyasya parihārārtham anyathā parikalpayanti / pratir vipsārthaḥ / itau sādharma ityā anavasthāyinaḥ / utpūrvāḥ padīḥ prādurbhāvārthaḥ / tāṃ tāṃ kāraṇasāmagriṃ prati ityānāṃ samavāyenoṭpādāḥ pratītyasamutpāda iti / eṣā tu kalpanā 'traiva yujyate / iha katham bhaviṣyati cakṣuḥ pratītya rūpāṇi cōtpadyate cakṣurvijñānam iti /

ところで、他の人々(すなわち大徳シュリーラータ)は、こ [の文法家] の非難を回避するために、別様に考える。

【シュリーラータ】「[karmapravacaniyaである]‘prati’は普及(vīpsā)を意味する。滅するにふさわしいものが‘itya’(滅すべきもの)であり、一時的なもの(anavasthāyin)である。[‘sam’というupasargaは一緒という意味を表示する]。‘ud’を先行とする[動詞語根]√padは現出(prādurbhāva)を意味する。[このような場合]、それぞれの原因の集合ごとに、諸々の滅すべきもの(itya)と一緒に現出することが‘pratīyasamutpāda’[という語の意味]である」と。

【有部】しかし、このような考えはここ(Pratīyasamutpādasūtra)に対してのみ妥当する。[しかし]次のような「眼と諸色に到達して(pratīya)眼識が生ずる」という[経典]ではどうして[成立]しようか。

Vasubandhuはこの経典を引用することにより、‘pratīyasamutpāda’という語の‘prati’を「普及」(vīpsā)の意味で解釈しようとするシュリーラータを非難するのであるが、VisにおいてBuddhaghosaはAKBhとは全く異なる議論を展開するために、全く同じ経典を引用しているのである。この事実をどう考えるべきか。全く異なる議論であるにも拘わらず、Buddhaghosaは、数ある経典の中で、AKBhに引用されるのと「全く同じ経典の全く同じ一節」をわざわざ引用しているのである。同じ経典の同じ一節が、「縁起の語義解釈」というコンテキストの中で、共通して取り上げられていることは単なる偶然なのだろうか。仮にBuddhaghosaがAKBhを知らなかったとすれば、この経典の一節は、南北アビダルマにおいて、よほど重要な問題を含む経典として常に意識されていたということになる。しかし、BuddhaghosaがVasubandhuの著作を知らずに、Vasubandhuと同様に、Pāṇini 3.4.21という規則を偶然問題にし、さらに、同じ経典の一節を偶然使っている、というのは、偶然が重なり過ぎているように思える。むしろこれら二つの類似点を考慮するならば、BuddhaghosaはAKBhを読んだ上で、AKBhとは違った議論をさらに展開させている、と考えるべきであろう。なお、この二つの類似点は、VyY、PSVyにおいても同様であるから、Buddhaghosaは、AKBhだけではなく、VyYやPSVyを知っていた可能性もある。この点については、今後、思想的な面からの詳細な比較考察が必要である。おそらく、Buddhaghosaは、Vasubandhuの著作を知っていたであろうと考へるが、彼が、AKBhだけを参照したのか、それとも、VyYやPSVyなども参照したのかという点については本稿では限定しないでおきたい。

## II-1-2. Pmにおける喩例

さて、Pmの議論について見ていこう。上述のVisに対して、Dhammapālaは次のような復註を与えている<sup>6</sup>。

Pm p. 1180, ll. 10-14: “paṭīccasamuppādo” ti ettha pana uppādasaddassa bhāvasādhanatāya kiriyā va vuttā ti samānakattarlakkhaṇo saddappayogo na

sambhavatīti / tenāha--- ‘saddabhedam gacchatī’ ti, apasaddappayogo hoti ti attho / na  
ceththa parāvarayogo “appatvā nadiṃ pabbato, atikkamma pabbataṃ nadi” ti ādisu viya,  
nāpi lakkhaṇahetuā dipayogo “sihaṃ disvā bhayaṃ hoti, ghaṭaṃ pivitvā balaṃ jāyate,  
dhaṃ ti katvā daṇḍo patito” ti ādisu viya /

また ‘paṭīcasamuppāda’ について、この場合、‘uppāda’ という語は ‘bhāva’(行為) の  
意味で実現された語であるから、まさに行為が述べられたのであり、同一の行為主体に  
よって特徴づけられる語の使用はありえないから、したがって「語 [の法則] に合わない  
ことになる」と [Buddhaghosa 先生は] 述べる。離れた語の使用になるという意味  
である。またこの場合、「川を越える前に、山 [がある]、山を越えて川 [がある]」云々  
というように、彼方 (para) と此方 (avara) にあるものとの結び付き (cf. Pāṇini 3.4.20  
“parāvarayoge ca”) が無い。また、「ライオンを見て、恐怖が生ずる」「バターを飲んで、  
力が生ずる」「ドスンと言って、棒 (daṇḍa) が倒れる」云々というように、特徴と原因  
等との結び付きもない。

ここで、Vis 及び Pm に言及される喩例に注目して整理しておこう。なお、これ以後、  
“〈1 - Vis〉” というように、番号と出典の略号に 〈 〉 をつけたものを喩例の冒頭に付け、対  
応関係を整理していくことにしたい。Sanskrit 文献について出典が不明なものや、筆者が Pali  
語から還梵想定したものについては、Skt という記号を使うことにする。

〈1 - Vis〉 p. 520, l. 2-3: “cakkhuṃ ca paṭicca rūpe ca uppajjati cakkhuviññānaṃ” .

〈1 - Pm〉 p. 1180, l. 7 etc.: “cakkhuṃ ca paṭicca rūpe ca uppajjati cakkhuviññānaṃ” .

「眼と諸色に到達して (pratītya)、眼識が生ずる」

〈1 - Pm〉については、上述の議論の直前で言及されるものである。この喩例はすでに言及し  
たように、経典の一節であるが、同じ内容が、AKBh, VyY, PSVy, 及び PP, PrP すべてにわ  
たって言及される。〈1 - Vis〉 と 〈1 - Pm〉 を AKBh から還梵想定すれば次のようになる。

〈1 - AKBh〉 p. 138, l. 24 etc.: “caḥṣuḥ pratītya rūpaṇi cōtpadyate caḥsurvijñānaṃ” .

さて、Vis において、AKBh, VyY, PSVy 等と重複する喩例は 〈1 - Vis〉 だけであるが、上  
述した Pm には、VyY や PSVy に言及される喩例と重複するものが複数にわたって言及される  
ので、それらを上の Pm の言及から抜き出していこう。なお、VyY や PSVy の言及との比較は  
次の節で行う。

〈2 - Pm〉 p. 1180, l. 12: “appatvā nadim̐ pabbato, atikkamma pabbataṃ nadī” .

「川を越える前に、山 [がある]、山を越えて川 [がある]」

まず、この喩例は、Pāṇini 3.4.20 “parāvarayoge ca” を意識したものであるが、〈2 - Pm〉の喩例は、以下の Sanskrit とほぼ対応する。

〈2 - Skt〉 “aprāpya nadim̐ parvataḥ sthitaḥ, atikramya tu parvataṃ nadī sthitā” .

「川の手前に山がある、山の向うに川がある」

〈2 - Pm〉が、〈2 - Skt〉に由来することは明らかであろう。この〈2 - Skt〉は、もともとは、文法学派が使用する典型的な喩例であり<sup>7</sup>、仏教思想や経典に特有な喩例ではないことを確認しておきたい。

さらに、上述の Pm における残りの喩例を見ていこう。

〈3 - Pm〉 p. 1180, l. 13: “sihaṃ disvā bhayaṃ hoti” . 「ライオンを見て、恐怖が生ずる」

〈4 - Pm〉 p. 1180, l. 13: “ghataṃ pivitvā balaṃ jāyate” . 「バターを飲んで、力が生ずる」

〈5 - Pm〉 p. 1180, l. 14: “dhaṃ ti katvā daṇḍo patito” . 「ドスンと言って、棒 (daṇḍa) が倒れる」

これら 〈3 - Pm〉 ~ 〈5 - Pm〉の三つの喩例と酷似したものが、VyY と PSVy でも言及される。さらに、Pm ではこれら三つ以外に次のような喩例が見受けられる。今回は、紙面の都合で議論そのものについては考察せずに、喩例だけを抜き出すことにする。

〈5' - Pm〉 p. 1188, l. 13: “ḍakkacca patito daṇḍo” . 「ドスンと言って、棒 (daṇḍa) が倒れる」

〈6 - Pm〉 p. 1179, l. 16: “nhatvā bhuñjati” . 「沐浴して食事する」

〈7 - Pm〉 p. 1188, l. 6: “mukhaṃ byādāya sayati” . 「口を開いて眠る」

〈5' - Pm〉は、〈5 - Pm〉の語形がやや変化したものである。〈6 - Pm〉及び〈7 - Pm〉については、AKBh・VyY・PSVy さらに PP に共通した内容の喩例が見られる。

〈3 - Pm〉から〈7 - Pm〉までを還梵想定すると次のようになる。なお、〈3 - Pm〉 ~ 〈5' - Pm〉については、これらに対応する Sanskrit 文献をまだ発見していないため、筆者がパーリ語から還梵想定したものである。また、〈6 - Pm〉と〈7 - Pm〉については、AKBh 及び *Abhidharmakośavyākhyā* (以下 AKV) の言及に基づいて還梵想定を示しておく。

- 〈3 - Skt〉“*siṃhaṃ dr̥ṣṭvā bhayaṃ bhavati*” . 「ライオンを見て、恐怖が生ずる」  
 〈4 - Skt〉“*ghṛtaṃ pītva balaṃ jāyate*” . 「バターを飲んで、力が生ずる」  
 〈5 - Skt〉“*dham iti kṛtvā daṇḍaḥ patitaḥ*” . 「ドスンと言って、棒 (daṇḍa) が倒れる」  
 〈5' - Skt〉“*ḍakṛtya daṇḍaḥ patitaḥ*” . 「ドスンと言って、棒 (daṇḍa) が倒れる」  
 〈6 - AKBh〉 p. 138, l. 5: “*snātvā bhunkte*” . 「沐浴して食事する」  
 〈7 - AKV〉 p. 296, l. 16 etc.: “*mukhaṃ vyādāya śete*” . 「口を開いて眠る」  
 〈7' - AKBh〉 p. 138, l. 20: “*āsyam vyādāya śete*” . 「口を開いて眠る」

上記のうち、〈6 - AKBh〉は、上述の Pāṇini 3.4.21 “*samānakartṛkayoḥ pūrvakāle*” を意識したものである。Pāṇini 3.4.21 について、Katre [1989: 328] は “*bhuktvā vrajati*” 及び “*snātvā pītva bhuktvā vrajati*” という二つの喩例を挙げて説明しているが<sup>8</sup>、Vasubandhu が使用する 〈6 - AKBh〉の喩例である “*snātvā bhunkte*” という語形そのものについて Katre は言及していない。“*snātvā bhunkte*” という語形が、文法学派の論書に言及されるかどうかは調査中であるが、おそらくこの語形は Vasubandhu が文法学派の論書を読んだ上で、自分で考えた喩例なのだと思います。なお、AKBh の中では対論者である文法学派が Pāṇini 3.4.21 の正当性を説明するためにこの喩例を用いているから、この喩例が文法学派の論書の中にそのままの語形で言及されていても全く問題はない。

次に 〈7 - AKV〉の “*mukhaṃ vyādāya śete*” と同じ語形は AKBh には見られないが、AKBh では「偈中」で “*āsyam vyādāya śete*” という語形が言及される。Vasubandhu は、偈のミーターを考慮して ‘*mukha*’ ではなく ‘*āsyā*’ という言葉を使用したと考えられるから、Vasubandhu が AKBh で意図しているものは “*mukhaṃ vyādāya śete*” という語形であったと考えて問題はない。

ところで、Pāṇini 3.4.21 について、*Mahābhāṣya* (MBh: Raghunāth & Śivadatta [1973: 261]) には、“*vyādāya svapiti*” という喩例が言及されている。〈7 - AKV〉に言及される “*mukhaṃ vyādāya śete*” という喩例は、この議論と何らかの関連があると思われるが、〈7 - Pm〉“*mukhaṃ vyādāya sayati*” の ‘*sayati*’ を還梵想定すると、その語形は、‘*svapiti*’ ではなく ‘*śete*’ となるから、「語形」という点から言えば、〈7 - Pm〉の語形は、MBh の語形ではなく、〈7 - AKV〉の語形にぴったりと一致していると言える。

以上、Pm における七つの喩例を見てきたが、これらが VyY と PSVy にはほぼ共通して言及されることを以下より確かめていきたい。

## II-2. VyY と PSVy における喩例

以下、VyY と PSVy について見ていくが、その前に Vasubandhu の著作の成立順序について整理しておきたい。Vasubandhu には *Karmasiddhiprakaraṇa* (以下 KS)、*Vimśatikā Vijñaptimātratāsiddhi* (以下 Viṃś), *Triṃśikā Vijñaptimātratāsiddhi* (以下 Triṃś) などの作品があるが、すでに松田和信氏が言及しているように<sup>9</sup>、著作の成立順序は以下の通りである。



AKBh → VyY → KS → PSVy → Vimś → Triṃś

上記のうちで、縁起の語義解釈の議論は、AKBh, VyY, PSVy において展開されているから、Vasubandhu の語義解釈に関する議論も、この順序で展開していることを確認しておきたい。

それでは、以下より、VyY と PSVy の議論を見ていくことにする。

## II-2-1. 〈1-Pm〉・〈2-Pm〉に対応する喩例

Pm の七つの喩例に対応するVyY と PSVy の言及をそれぞれ列挙しよう。まずは、〈1-Pm〉・〈2-Pm〉に対応するものについてである。

VyY D 86a1-3; P 100b8-101a2: de bzhin du mig dang gzugs la brten nas mig gi rnam par shes pa skye'o zhes bya ba'i sbyor ba 'di yang rigs pa ma yin te / byed pa po gcig pu dag la bya ba gnyis shig yod na ni dus snga ma shos kyi bya ba la [P 101a] de lta bu'i sbyor ba yang 'byung ste / dper na 'khar ba la 'jus nas ldang ba lta bu'am / gzhan dang gzhan phrad pa la ni dper na chu brgal nas ri yod do zhes bya ba lta bu yin na / rnam par shes pa ni gang zhig gis brten nas phyis skye bar 'gyur ba'i skye ba snga rol na yang med cing 'di la gzhan dang gzhan phrad pa yang med par bsams so //

同様に、“caksuḥ pratītya rūpāni cotpadyate caksurvijñānam” という以上の言葉の使用 (prayoga) も妥当しない。同一の行為主体に対して、二つの行為がある場合、先行時の行為に対して、そのような言葉の使用も起こる。例えば「杖を突いて立つ」の如くである。あるいは相互に到達することに対する [‘Ktva’ という接辞の導入 (vidhi) が見られる]。例えば「川を越えて山がある」という如きであるならば、識 (vijñāna) は、[先に]あるものに依存して (pratītya) [すなわち到達して (prāpya)] 後に生起するような生起 (utpāda)[の主体である識] は、[生起する] 以前には存在せず、こ [の例] については相互に到達する [という意味] もないと考えられる。

PSVy D 58a7-58b2; P 67b7-68a1: gzhan dag na re rten (P: brten) te 'brel bar 'byung ba zhes bya ba la ste zhes bya ba yod pa 'di ni pha rol dang tshu rol sbyor ba yin par rig par bya ste / dper na chu ba rgal te ri yod pa dang / dbyar 'das te [D 58b] ston (P: sngon) byung ba lta bu yin pas de dag gi ni (D & P: de dag gis) mig dang gzugs la brten te mig gi rnam par shes pa skye'o zhes pa 'di yang pha rol dang tshu rol sbyor ba tsam yin par mngon gyi rgyu dang 'bras bu'i dngos po ni ma yin no zhes zer na / mig gi [P 68a] rnam par shes pa'i rkyen dang dmigs pa 'das pa yin par thal (D: bral) bar 'gyur ro //

他の人々は[次のように]言う。「[prāṭīyasamutpāda]という[語]について、この‘Ktvā’ という[接辞の]導入(vidhi)は、彼方(para)と此方(avara)という言葉の使用(prayoga) [に対して用いられるもの]である、と知られるべきである。例えば、「川を越えて山がある」、そして、「雨期を越えて秋(śarad)が生ずる」というように[言われる]から、彼等にとって“cakṣuḥ prāṭīya rūpāṇi cōtpadyate cakṣurvijñānam”というこ[の表現]も、彼方(para)と此方(avara)という言葉の使用(prayoga) [に対して用いられるもの]にほかならないと理解されるが、因果関係が[理解されるのでは]ない、と言うならば、眼識の縁と対象が過去のものである、という望ましくない結果になってしまう。

まず、上記に言及される喩例を抜き出し、Pm と還梵想定した Sanskrit と並べて整理しよう。

- 〈1 - Pm〉 p. 1180, l. 7 etc.: “cakkuḥ ca paṭicca rūpe ca uppajjati cakkhuviññānam” .  
 「眼と諸色に到達して (prāṭīya)、眼識が生ずる」
- 〈1 - AKBh〉 p. 138, l. 24 etc.: “cakṣuḥ prāṭīya rūpāṇi cōtpadyate cakṣurvijñānam” .
- 〈1 - VyY〉 D 86a1 etc.: “mig dang gzugs la brten nas mig gi rnam par shes pa skye'o” .
- 〈1 - PSVy〉 D 58b1 etc.: “mig dang gzugs la brten te mig gi rnam par shes pa skye'o” .  
 「眼と[諸]色に到達して (prāṭīya)、眼識が生ずる」
- 〈2 - Pm〉 p. 1180, l. 12: “appatvā nadim pabbato, atikkamma pabbataṃ nadi” .  
 「川を越える前に、山 [がある]、山を越えて川 [がある]」
- 〈2 - Skt〉 “aprapya nadim parvataḥ sthitaḥ, atikramya tu parvataṃ nadi sthita” .  
 「川の手前に山がある、山の向うに川がある」
- 〈2' - VyY〉 D 86a2: “chu brgal nas ri yod do” . 「川を越えて山がある」
- 〈2' - PSVy〉 D 58a7: “chu ba rgal te ri yod pa” . 「川を越えて山がある」

〈1 - VyY〉 と 〈1 - PSVy〉 は 〈1 - Pm〉 とよく対応する。しかし、〈2' - VyY〉 と 〈2' - PSVy〉 は、〈2 - Pm〉 の後半部と酷似してはいるが、よく見ると、「川」と「山」の順序が入れ替わっていることがわかる。この違いは、もともと 〈2 - Skt〉 にある Sanskrit を、Dhammapāla がそのまま Pāli 語化させたのに対し、Vasubandhu は、〈2 - Skt〉 の言い回しを変化させたことによるものと思われる。もし、Dhammapāla が Vasubandhu の「VyY あるいは PSVy だけ」を参照していたとするならば、〈2 - Pm〉 は、〈2' - VyY〉 や 〈2' - PSVy〉 と同じ内容になるはずである。だが、そうならないことを考えると、Dhammapāla は少なくとも「VyY や PSVy 以外の文献」を必ず参照していると考えなければならない。

ただし、興味深いことに、PSVy には ‘Pāṇini’ という言葉が言及され、しかも Pāṇini 3.4.20 の規則である “parāvarayoge ca” というストラの蔵訳らしきものが見つかる。

PSVy D 58b6-7; P 68a7-8: de ltar ni pha rol dang tshu rol sbyor (D and P: ba) zhes zer ba dang (D and P omit dang) pa ñi ni bdag kyang 'dod pa ma yin no //

そのように、“parāvarayoge ca”(Pāṇini 3.4.20)というPāṇini [文法の規則] は、本質 [的に] も認められない。

Pāṇini という言葉が蔵訳でそのまま言及されていることは大変興味深い。さらに、“pha rol dang tshu rol sbyor zhes zer ba dang”という蔵訳が、“parāvarayoge ca”を意味すると思われる。なお、異読については *Pratītyasamutpādayākyātikā* (以下 PSVyT) より訂正しているが、最後の ‘dang’ がおそらく “parāvarayoge ca” の ‘ca’ を意味するはずである。

このように、PSVy では、‘Pāṇini’ という言葉のほかにも、“parāvarayoge ca” というストトラが明言されているから、Dhammapāla がこの PSVy の言及を見た上で、その言及をもとにして、文法学派の論書を自身で確認し、〈2-Skt〉の喩例にたどり着き、〈2-Skt〉から〈2-Pm〉の喩例を導きだした可能性が考えられる。

## II-2-2. 〈3-Pm〉・〈4-Pm〉に対応する喩例

では次の喩例を見よう。次は、〈3-Pm〉・〈4-Pm〉に対応するものについてである。

VyY D 91a6-7; P 107a2-3: 'jig rten na ni gzhan du yang mthong ste / 'di ltar de lta bu'i sbyor ba ni byed pa po tha dad pa la yang mthong ste / dper na mar 'thungs nas stobs 'byung ngo // seng ge mthong nas 'jigs pa 'byung ngo zhes bya ba lta bu yin no //

世間においては別様にも見られる、すなわち、そのような言葉の使用は、異なる行為主体に対しても見られる。例えば「バターを飲んで、力が生ずる」、「ライオンを見て、恐怖が生ずる」と言われるが如きである。

PSVy D 58b3; P 68a2-3: byed pa po mi mthun pa la yang mthong ste / 'jig rten na mar 'thungs te stobs yod do zhes bya ba dang / seng ge (P: se ngge) mthong ste 'jigs so zhes bya ba dang / bha ra ta las kyang 'dro ña'i bu (D and P: 'dro ña'i bu) ngo mtshar cher gyur (D: 'gyur) ba'i bros pa mthong ste /

〔‘Ktvā’ という接辞の導入 (vidhi) は〕異なる行為主体に対しても見られる。世間において、「バターを飲んで、力が生ずる」と言われ、「ライオンを見て、恐怖する」と言われ、[Mahā]bhārataにも、希有なるドローナの息子が逃亡する][という例が]見られる。

ここでも同様に、上記に言及される喩例を抜き出して整理しよう。

〈3 - Pm〉 p. 1180, l. 13: “sihaṃ disvā bhayaṃ hoti” . 「ライオンを見て、恐怖が生ずる」

〈3 - Skt〉 “siṃhaṃ dr̥ṣṭvā bhayaṃ bhavati” . 「ライオンを見て、恐怖が生ずる」

〈3 - VyY〉 D 91a7: “seng ge mthong nas 'jigs pa 'byung ngo” . 「ライオンを見て、恐怖が生ずる」

〈3'-PSVy〉 D 58b3: “seng ge mthong ste 'jigs so” . 「ライオンを見て、恐怖する」

〈4 - Pm〉 p. 1180, l. 13: “ghataṃ pivitvā balaṃ jāyate” . 「バターを飲んで、力が生ずる」

〈4 - Skt〉 “ghṛtaṃ pītṅvā balaṃ jāyate” . 「バターを飲んで、力が生ずる」

〈4 - VyY〉 D 91a6: “mar 'thungs nas stobs 'byung ngo” . 「バターを飲んで、力が生ずる」

〈4'-PSVy〉 D 58b3: “mar 'thungs te stobs yod do” . 「バターを飲んで、力が生ずる」

これらの喩例については、それぞれよく対応していることが一目瞭然である。〈3'-PSVy〉では、'jigs so' (恐怖する) という動詞が使われており、〈3 - Pm〉 や 〈3 - VyY〉 とやや語形が異なる。これは、Vasubandhu が PSVy においては動詞形で言及していたのかもしれないし、蔵訳者が正確に訳さなかったのかもしれない。語形にわずかな違いはあるが、これらが同じ喩例であることは明らかである。また、〈4'-PSVy〉については、'yod do' を 'bhavati' に解せば '生ずる' と読むことができるから、これらの喩例についても問題なく対応していると言える。

なお、上述の言及において、Vasubandhu は、VyY においても PSVy においても、'jig rten na' (世間において) とわざわざ言及していることに注意したい。つまり、Vasubandhu は「文法学派の論書」に基づいてではなく、「世間の慣習上の言語表現」に基づいて、これらの喩例を挙げていることをあらわすために、ここで 'jig rten na' と言及しているものと考えられる。

ここで、Vasubandhu は Pāṇini 3.4.21 “samānakartṛkayoḥ pūrvakāle” という規定に対する反論として、「二つの [行為が] 同じ行為主体に属する場合」(samānakartṛkayoḥ) でなくとも、Ktvā という接辞が適用される” ということを示すために、「世間の慣習上の言語表現」から 〈3 - VyY〉 や 〈4 - VyY〉 といった喩例を持ち出してきているのだと思われる。もし仮に、文法学派の論書にこの喩例があるとすれば、例外規則の中において説明される喩例でなければならないはずである。だが、VyY と PSVy を素直に読めば、「文法的には間違っているかもしれないが、世間でよく言われる言われる慣用表現」としてこれらの喩例を Vasubandhu が使っているのだと考えられる。

### II-2-3. 〈5 - Pm〉 に対応する喩例

さて、次の喩例を見ていこう。次は、〈5 - Pm〉 に対応するものについてである。なお、これについては、AKTA と AKLA にも共通する喩例が言及されているので、それらも挙げることにする。

VyY D 91b4; P 107a7-8: de bzhin du khar ba khrol (D and P: khral) zhes zer nas  
lung zhes bya ba lta bu ste / de yang sngar khrol zhes zer la physis lung ba yang  
ma yin te / khar ba lung ba na sgra khrol (D and P: khral) zhes zer te / brgyab pa'i (P:  
brgya ba'i) phyir ro //

同様に「棒 (daṅḍa) がドスンと言って倒れる」というように。そ[の例]も、まず「ド  
スン」と言って、後に倒れるのではない。なぜなら、棒 (daṅḍa) が倒れるとき、ドス  
ンと言うのである。なぜなら、[音は] 打撃 [を原因とする] からである。

PSVy D 58b6; P 68a6-7: dus physis bya ba byed pa la yang mthong ste rnga'i byed  
pa la brten te dbyu (P: dbyug) gu rdeg pa lta bu ste / rnga 'di (D: ni) sngar byed la  
physis dbyu (P: dbyug) gu rdeg pa ni ma yin no // dus mnyam pa yang ma yin te /  
sgra ni brdabs pa'i rgyu las byung ba'i phyir ro //

後時になされた行為に対しても [‘Ktvā’ という接辞の導入 (vidhi) は] 見られる。太  
鼓の [音を] なすことに依存して棒 (daṅḍa) が叩くように。この太鼓がまず [音を]  
なして、その後に棒 (daṅḍa) が叩くのではない。同時 [の行為における ‘Ktvā’ という  
接辞の導入 (vidhi)] でもない。なぜなら、音は打撃を原因とするからである。

AKTA D 375b4-5, P 58b2-3: dbyu gu khrol zer te ltung ngo zhes physis kyī dus la  
yang ktva'i rkyen dmigs so // sngar (D and P: cur) khrol zer te physis ltung ba ni ma  
yin te / sgra ni mngon par brdabs pa'i rgyu las byung ba'i phyir ro //

「棒 (daṅḍa) がドスンと言って倒れる」というように、後の時間 [の行為] に対しても、  
Ktvā接辞 [の導入] が見られる。まずドスンと言って後に倒れるのではない。なぜなら、  
音は、打撃を原因とするからである。

AKLA D 299b6, P 352a4-5: dbyu gu khrol zer te ltung ngo zhes physis kyī dus la yang  
de'i rkyen dmigs so // sngar khrol zer te physis ltung ba ni ma yin te / sgra ni mngon  
par brdabs pa'i rgyu las byung ba'i phyir ro //

「棒 (daṅḍa) がドスンと言って倒れる」というように、後の時間 [の行為] に対しても、  
それ [Ktvā] 接辞 [の導入] が見られる。まず「音をたてて」後に「倒れる」のではない。  
なぜなら、音は、打撃を原因とするからである。

ここに言及される喩例を整理すると次のようになる。

〈5 - Pm〉 p. 1180, l. 14: “dham ti katvā daṅḍo patito” . 「ドスンと言って、棒 (daṅḍa)  
が倒れる」

- 〈5 - Skt〉“dham iti kṛtvā daṇḍaḥ patitaḥ” . 「ドスンと言って、棒 (daṇḍa) が倒れる」  
 〈5' - Pm〉 p. 1188, l. 13: “ḍakkacca patito daṇḍo” . 「ドスンと言って、棒 (daṇḍa) が倒れる」  
 〈5' - Skt〉“ḍakṛtya daṇḍaḥ patitaḥ” . 「ドスンと言って、棒 (daṇḍa) が倒れる」  
 〈5 - VyY〉 D 91b4: “khar ba khrol zhes zer nas lhung” . 「棒 (daṇḍa) がドスンと言  
 って倒れる」  
 〈5" - PSVy〉 D 58b6: “rnga'i byed pa la brten te dbyu gu rdeg pa” .  
 「太鼓の [音を] なすことに依存して棒 (daṇḍa) が叩く」  
 〈5 - AKTA〉 D 375b4: “dbyu gu khrol zer te ltung ngo” . 「棒 (daṇḍa) がドスンと言  
 っ  
 て倒れる」  
 〈5 - AKLA〉 D 299b6: “dbyu gu khrol zer te ltung ngo” . 「棒 (daṇḍa) がドスンと言  
 っ  
 て倒れる」

〈5 - VyY〉は、〈5 - Pm〉あるいは〈5' - Pm〉とよく対応する。だが、〈5" - PSVy〉はそれらとは対応しない。おそらく、Vasubandhu は〈5 - VyY〉の喩例を PSVy において重複して説明することを避けようとして、「太鼓」の喩例に言い換え、語形や内容を変化させているのではないと思われる。なお、この喩例において、「打撃」云々という理由を最後に説明していることは、〈5 - VyY〉と〈5" - PSVy〉とに共通するから、これらが同じ内容を意図して使用されている喩例であることは明らかである。

なお、この AKTA と AKLA は「口を開いて眠る」などの喩例についても、この直前で言及している。AKTA と AKLA はAKBh の註釈であるから、そのこと自体は全く特別なことではない。だが、「棒 (daṇḍa) がドスンと言って倒れる」という喩例は、AKBh にも PSVy にも全く言及されない喩例である。にも拘わらず、AKTA と AKLA がこの喩例に言及しているということは、Sthiramati と Pūrṇavardhana は「VyY をも参照した上でAKBh の註釈を行っている」ということになる。あるいは、彼らが、何か「別の論書」を参照した上で、この喩例に言及した可能性もあるかもしれない。

さらに、Vasubandhu はこの喩例においても Pāṇini 3.4.21 “samānakartṛkayoḥ pūrvakāle” という規定に対する反論を意図しているのであって、「先行時に」(pūrvakāle) でなくとも、Ktvā という接辞が適用される” ということを示すために、〈5 - VyY〉や〈5" - PSVy〉といった喩例を挙げているのだと思われる。もし文法学派の論書にこの喩例が言及されるとすれば、例外規則として言及されている可能性はあるけれども、Vasubandhu が Pāṇini 3.4.21 という規定に対する反論として挙げる喩例なのであるから、その可能性はかなり薄いように思える。

#### II-2-4. 〈6 - Pm〉・〈7 - Pm〉に対応する喩例

さらに、次の喩例を見よう。以下は、〈6 - Pm〉及び〈7 - Pm〉に対応する喩例である。

VyY D 91a7-91b2; P 107a3-5: dus snga ma shos ma yin pa la yang mthong ste / dper na kha gdangs nas nyal [D 91b] zhes bya ba'am / mig btsums nas nyal zhes bya ba lta bu'o //

ci kha gdangs nas sam / mig btsums nas dus phyi ma la nyal ba ma yin nam zhe na /

mi rung ste / ji ltar sngar khurus byas nas physis za ba lta bur sngar kha gdangs pa'am / mig 'dzums par byed la / physis nyal ba'i don 'dir ni khong du chud par mi 'gyur ro //

【Vasubandhu】先行時でない[行為]に対しても[言葉の使用が]見られる。例えば「口を開いて眠る」と言われ、或いは「眼を閉じて眠る」と言われるようなものである。

【文法学者】[先行時に]「口を開いて」、あるいは「眼を閉じて」、後の時間に「眠る」のではないか、というならば。

【Vasubandhu】妥当しない。例えば、「まず沐浴して、後に食事する」というように、まず「口を開くこと」、あるいは「眼を閉じること」をなして、後に「眠る」という意味は、ここでは、理解されないであろう。

PSVy D 2b4-6; P 3a3-5: rten cing zhes bya ba ni rkyen de las zhes bya ste / ji ltar bud shing la brten nas me 'byung ngo zhes bya ba rten de las zhes bya bar mngon no // sprin la brten nas char 'bab po zhes bya ba sprin 'dus pa las zhes bya bar mngon no // gangs ri la brten nas sman rnams (D omits rnams.) skye'o zhes bya ba gzhi 'di las zhes bya bar mngon pa yin gyi / ji ltar khurus byas nas zas za ba lta bur dus snga phyi nyid ni ma yin no //

「pratitya' (到達して)」とは、「その縁から」という[意味]である。例えば、「燃料に依存して火が生ずる」[と言われる場合、「燃料に依存して」]とは「その依り所から」という[意味である]ことが明らかである。「雲に依存して雨が降る」[と言われる場合、「雲に依存して」]とは「集まった雲から」という[意味である]ことが明らかである。「ヒマラヤに依存して諸々の薬草が生ずる」[と言われる場合、「ヒマラヤに依存して」]とは「この所依から」という[意味である]ことが明らかである。だが、例えば「沐浴して食事を食べる」というように、[二つの行為の間に]前後関係があるのではない。

PSVy D 58b4-5; P 68a5: dus mthun par bya ba byed pa la yang mthong ste / kha gdangs te nyal ba dang / mig zlog ste nyal ba lta bu'o //

同一時になされた行為に対しても['Ktvā' という接辞の導入(vidhi)は]見られる。「口を開いて眠る」、「眼を閉じて眠る」というように。

これらを整理しよう。

- 〈6 - Pm〉 p. 1179, l. 16: “nhatvā bhuñjati” . 「沐浴して食事する」  
〈6 - AKBh〉 p. 138, l. 5: “snātvā bhuñkte” . 「沐浴して食事する」  
〈6' - VyY〉 D 91b1: “sngar khruṣ byas nas phyis za ba” . 「まず沐浴して、後に食事する」  
〈6' - PSVy〉 D 2b6: “khruṣ byas nas zas za ba” . 「沐浴して食事を食べる」
- 〈7 - Pm〉 p. 1188, l. 6: “mukhaṃ byādāya sayati” . 「口を開いて眠る」  
〈7 - AKV〉 p. 296, l. 16 etc.: “mukhaṃ vyādāya śete” . 「口を開いて眠る」  
〈7' - AKBh〉 p. 138, l. 20: “āsyam vyādāya śete” . 「口を開いて眠る」  
〈7 - VyY〉 D 91a7: “kha gdangs nas nyal” . 「口を開いて眠る」  
〈7 - PSVy〉 D 58b4: “kha gdangs te nyal ba” . 「口を開いて眠る」

これらについても、それぞれがほぼ対応している。まず、〈6' - VyY〉は、〈6 - AKBh〉の内容を言い換えたものにほかならない。また、〈6' - PSVy〉の ‘zas za ba’ (食事を食べる) という蔵訳も、AKBh の ‘bhuñkte’ を少し言い換えた表現にほかならない。次に、〈7 - VyY〉と 〈7 - PSVy〉は、全く同じ意味であるが、‘kha’ は、‘āsyā’ でも ‘mukha’ でも両方の解釈が可能であるため、〈7 - AKV〉と 〈7' - AKBh〉の両方に対応していると言える。これら最後の二つ喩例に関しては、Pm ととも全く問題なく対応していることが明らかである。

なお、AKBh において、〈6 - AKBh〉は文法学派が用いる喩例として挙げられているから<sup>10</sup>、この喩例そのものは文法学派の論書に言及されていても全く問題はない。むしろ、ここで言及される喩例は、文法学派側の例証なのであるから、Pāṇini 3.4.21 “samānakarṭṛkayoḥ pūrvakāle” という規定に沿うものでなければならない。一方、〈7' - AKBh〉や 〈7 - VyY〉等は、Pāṇini 3.4.21 に対する Vasubandhu の反論であるが、上述したように、MBh には “vyādāya svapiti” という喩例が言及される。ただし、「語形」という点から言えば、〈7 - Pm〉の語形は、MBh の語形ではなく、〈7 - AKV〉の語形に一致している。

### III. 結論

最後に、七つの喩例の共通点と相違点に基づいて、Vasubandhu, Buddhaghosa, Dhammapāla たちの著作がどのように関係しているかまとめることにしよう。

まず、〈1 - Vis〉について言えば、Vasubandhu と Buddhaghosa が縁起解釈を行う際に、両者が、Pāṇini 3.4.21 を問題にし、かつまた同じ経典の同じ一節を参照していることは偶然である、と考えるのにはかなり無理がある。それを考慮すれば、Buddhaghosa が AKBh を知っていた可能性は高い。もし仮に Buddhaghosa が AKBh を知らないとすれば、Vasubandhu 以前に、この経典と縁起解釈についての問題を提示した仏教系の「論書 X」が存在し、南北のアビダルマ論師



である Vasubandhu と Buddhaghosa がそれぞれ「論書 X」を参照した、と考えねばならない。

〈2 - Pm〉については、Dhammapāla が、VyY と PSVy だけを見たという可能性はない。彼は文法学派が使用すると思われる〈2 - Skt〉を必ず参照している。ただし、Pāṇini という語や Pāṇini 3. 4.20 の規則である“parāvarayoge ca”というスートラが PSVy で明言されているから、Dhammapāla は PSVy も読んだ上で、その言及をもとに、文法学派の論書から〈2 - Skt〉を参照した可能性がある。

〈3 - Pm〉・〈4 - Pm〉・〈5 - Pm〉・〈6 - Pm〉・〈7 - Pm〉については、Dhammapāla が VyY と PSVy を見た可能性はかなり高い。あるいは、これらの喩例について言及する「論書 Y」があり、それを Vasubandhu と Dhammapāla がそれぞれ参照した可能性はあるかもしれない。だが、もし「論書 Y」が見つからないとすれば、Dhammapāla は VyY と PSVy を参照していると考えねばならない。そして、その場合、〈5 - Pm〉は〈5" - PSVy〉と対応しないから、Dhammapāla が PSVy だけを見たということはありません。彼は、少なくとも VyY を必ず見ているということになる。さらに、その場合、Dhammapāla は〈7 - Pm〉 p. 1188, l. 6: “mukhaṃ byādāya sayati”と言及しているから、〈7 - VyY〉の‘kha’という蔵訳に対応する梵語は、‘āśya’ではなく‘mukha’となっているはずであり、〈7 - PSVy〉の喩例についても、これは散文で言及されるものであるから、梵語は‘mukha’となっているはずである。

このように、〈3 - Pm〉から〈7 - Pm〉に至るまでの五つの喩例について言えば、Dhammapāla は、VyY と PSVy の両者か、あるいは少なくとも VyY を知っていると考えられる。あるいは、これら五つの喩例について言及する「論書 Y」が存在し、その「論書 Y」を Vasubandhu と Dhammapāla がそれぞれ参照している可能性もあるかもしれない。

あるいは、さらなる可能性もある。Vasubandhu 以前に、縁起の語義解釈に関する仏教と文法学派の対論があり、上述の「論書 X」と「論書 Y」を含めた「論書 Z」なるものが南北アビダルマの双方に伝えられていたという可能性である。だが、「論書 Z」のようなものが存在するかどうか現時点では調査中であるが未発見のため、本稿では Dhammapāla が Vasubandhu の VyY を必ず参照しており、また Buddhaghosa も Vasubandhu の著作を知っていたということで考えておきたい。

なお、以上の考察から次のことが導かれる。Dhammapāla が Vasubandhu の著作を知っているとすれば、Dhammapāla の活躍年代が確定されることによって、Vasubandhu の活躍年代が限定される。また、Buddhaghosa が Vasubandhu の著作を知っていたとするならば、Vis が完成したのは「429年かそれ以前」と言われているから<sup>11</sup>、Vasubandhu の年代を 400 年頃と見る近年の見解が妥当しており<sup>12</sup>、あるいは、もっと早い時期を想定することも必要になってくるかもしれない。彼等の活躍年代は近いだけに、今後、比較研究が必要と思われる。

以上、考察してきたが、北伝アビダルマ論師である Vasubandhu の著作を、なぜ南伝アビダルマ論師たちが参照する必要があるのかという基本的な問題について私見を述べておきたい。Vasubandhu の著作のうち、VyY 第四章では「大乘仏説論」が展開されている<sup>13</sup>。その批判の対

象となっているのは説一切有部の思想である。だが、その問題は南伝アピタルマの思想と全く無関係のものではなかったはずであり、彼等は、その「大乘仏説論」を論破する必要があったと思われる。あるいは、その「大乘仏説論」がもし有効であれば、Buddhaghosa や Dhammapāla たちは、その論理を使って、無畏山寺派ではなく、大寺派である自分たちの仏教こそが、正当なる仏教であるということを主張するために利用できたはずである<sup>14</sup>。その意味から考えても、当時、Vasubandhu の著作が存在していたとすれば、Buddhaghosa や Dhammapāla が Vasubandhu の著作に関心があっても決して不思議ではない。また、Buddhaghosa はスリランカに来島する前にインド本土で『解脱道論』を学んでいたと考えられているから<sup>15</sup>、すでに Buddhaghosa がインドにいた当時、Vasubandhu の著作がすでに完成していれば、その著作について知っているもおかしきではないのである。

本稿で扱ったわずかな喩例だけでは、単なる可能性を探ることしかできなかったが、上述の論書を思想的な面から比較研究することによって、今後、新たな発見が導き出されうるのではないかと考える次第である。

#### Abbreviations and Literature

##### Abbreviations

- AKBh: *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu). Prahlad Pradhan, ed. *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. TSWS 8. Patna: Jayaswal Research Institute, 1967.
- AKLA: *Abhidharmakośaṭīkākālakṣaṇānusārīnī* (Pūrṇavardhana) (Tib. *Chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel bshad mtshan nyid kyi rjes su 'brang ba shes bya ba*): D 4093, P 5594.
- AKTA: *Abhidharmakośabhāṣyaṭīkātattvārtha* (Sthiramati) (Tib. *Chos mngon pa mdzod kyi bshad pa'i rgya cher 'grel pa don gyi de kho na nyid ces bya ba*): D 4421, P 5875.
- AKV: *Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra). U. Wogihara, ed. *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*. Tokyo, 1932–36. Reprint, 1989.
- D: Derge edition of Tibetan Tripiṭaka: *SDE DGE TIBETAN TRIPITAKA BSTAN ḤGYUR, preserved at the Faculty of Letters, University of Tokyo. TSHAD MA*. 20 vols. Tokyo, 1981–84.
- KS: *Karmasiddhiprakaraṇa* (Vasubandhu) (Tib. *Las grub pa'i rab tu byed pa*): D 4062, P 5563.
- MBh: *Mahābhāṣya*. See Raghunāth & Śivadatta [1973].
- P: Peking edition of Tibetan Tripiṭaka: D. T. Suzuki, ed. *The Tibetan Tripiṭaka, Peking edition*. Reprinted under the supervision of the Otani University, Kyoto. 168 vols. Tokyo and Kyoto, 1955–1961.
- Pm: *Paramatthamañjūsā* (Dhammapāla). Rewatadhamma, ed., *Visuddhimaggo with Paramatthamañjūsāṭīkā*. Varanasi: Varanaseya Sanskrit Vishwavidyalaya. 1969–1972.
- PP: *Prajñāpradīpamūlamadhyamakavṛtti* (Bhāviveka) (Tib. *Dbu ma'i rtsa ba'i 'grel pa shes rab sgron ma*): D 3853, P 5253.

- PrP: *Prasannapadā* (Candrakīrti). L. de la Vallée Poussin, ed. *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā commentaire de Candrakīrti*. Bibliotheca Buddhica 4. 1903–13. Reprint, Tokyo, 1977.
- PSVy: *Pratītyasamutpādayākyā (Pratītyasamutpādādivibhaṅganirdeśa)* (Vasubandhu): D 3995, P 5496.
- PSVyT: *Pratītyasamutpādayākyāṭikā (Pratītyasamutpādādivibhaṅganirdeśaṭikā)* (Guṇamati): D 3996, P 5497.
- T: 『大正新脩大藏經』.
- Triṃś: *Triṃśikā Vijñaptimātratāsiddhi*. See Viṃś and Triṃś.
- Viṃś: *Viṃśatikā Vijñaptimātratāsiddhi*. See Viṃś and Triṃś.
- Viṃś and Triṃś: Sylvain Lévi, ed. *Vijñaptimātratāsiddhi: Deux Traités de Vasubandhu. Viṃśatikā (La Vingtaine) et Triṃśikā (La Trentaine)*. Paris: Librairie Ancienne Honore Champion Press, 1925.
- Vis: *Visuddhimagga* (Buddhaghosa). Davids, Rhys, ed. *The Visuddhi – Magga of Buddhaghosa*. London: Pali Text Society. 1920–21. Reprint, 1975.
- VyY: *Vyākhyāyukti* (Vasubandhu) (Tib. *Rnam par bshad pa'i rigs pa*): D 4061, P 5562.
- 本庄目録: See 本庄 [1984].

#### Literature

- Katre, Sumitra M.  
1989 *Aṣṭādhyāyī of Pāṇini. Roman Transliteration and English Translation*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Tucci, Giuseppe  
1930 A Fragment from the *Pratītya – samutpāda – vyākhyā of Vasubandhu*. JRAS pp. 611 – 623.  
1971 *Opera Minora*. 2vols. Roma: G. Bardi.
- Raghuṇāth Kāśīnāth Śāstrī & Śivadatta D. Kudāla  
1973 *Patañjali's Vyākaraṇa Mahābhāṣya with Kaiyaṭa's Pradīpa and Nāgeśa's Uddyota*. Vol.3. Bombay: "Nirṇaya-sāgar" Press.
- 江島恵教  
1985 「『中論』註釈書における「縁起」の語義解釈」『平川彰博士古稀記念論集 仏教思想の諸問題』東京: 春秋社. pp.139 – 157.
- 片山一良  
1992 「伝統仏教における縁起解釈」『ブツダから道元へ——仏教討論集——』東京: 東京書籍. pp.107 – 117.
- 加藤純章  
1989 『経量部の研究』東京: 春秋社.
- 楠本信道  
2001 「『俱舍論』における 'pratītyasamutpāda' の語義解釈」『印仏研』49(2): 121 – 124.  
2007 「『俱舍論』における世親の縁起観」京都: 平楽寺書店.

- 菅原泰典・才川雅明  
 1990 「第3章 瑜伽行・唯識論書(付 如来藏思想)」 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文『梵語  
 仏典の研究 論書編』京都: 平楽寺書店.
- 辻直四郎  
 1974 『サンスクリット文法』東京: 岩波書店.
- 永崎研宣  
 1999a 「Prasannapadā第一章における「縁起」の語義解釈について」『印仏研』47(2): 119-121.  
 1999b 「チャンドラキールティの縁起解釈について——ナーガールジュナの著作と「相互依存」  
 解釈との関連を中心として——」『印仏研』48(1): 158-160.
- 浪花宣明  
 1991a 「パーリ上座部の縁起の語義釈——Visuddhimagga, Paramatthamañjūsā 訳註——」『佛  
 教研究』20: 81-106.  
 1991b 「パーリ上座部の縁起の語義釈研究」『南都佛教』65: 1-18.  
 2000 「パーリ上座部の縁起説」『加藤純章博士還暦記念論集 アビダルマ仏教とインド思想』  
 東京: 春秋社. pp.195-207.  
 2001 『解脱道論』『新国訳大蔵経 19 論集部 5』東京: 大蔵出版.
- 能仁正顕  
 1986 「清弁の因果論に関する一考察」『印仏研』34(2): 317-320.  
 1992 「『知恵のともしび』第1章の和訳(1)——縁の考察——」『仏教と福祉の研究』京都: 永田  
 文昌堂. pp. 45-66.
- 馬場紀寿  
 2003 「縁起支解釈の展開——上座部大寺派の三世兩重因果説——」『インド哲学仏教学研究』  
 (東京大学)10: 17-31.  
 2008 『上座部仏教の思想形成——ブッダからブッダゴーサへ——』東京: 春秋社.
- 林寺正俊  
 1998 「Visuddhimaggaにおける縁起解釈の一考察——特に異熟支分をめぐる問題——」『印度  
 哲学仏教学』13: 131-146.
- 本庄良文  
 1984 『俱舍論所依阿含全表 I』京都: 私家版。  
 1990 「『釈軌論』第四章—世親の大乗仏説論(上)——」『神戸女子大学文学部紀要文学部篇』  
 23(1): 57-70.  
 1992a 「『釈軌論』第四章—世親の大乗仏説論(下)——」『神戸女子大学文学部紀要文学部篇』  
 25(1): 103-118.  
 1992b 「シャマタデーヴァの伝える阿含資料——世品(6)[51]-[75]——」『佛教研究』(国際) 21:  
 77-97.
- 松田和信  
 1984 「Vasubandhu研究ノート(1)」『印仏研』32(2): 82-85.  
 1998 「世親における縁起解釈の一考察」日本仏教学会(高野山大学)レジュメ。
- 松田慎也  
 1980 「『第一義宝函』における縁起解釈」『印仏研』28(2): 126-127.
- 水野弘元  
 1996 『仏教文献研究』東京: 春秋社.

- 1997 『パーリ論書研究』東京: 春秋社.  
室寺義仁
- 1986 『『俱舍論』・『成業論』・『縁起経釈』』『密教文化』156: 53-82.  
森祖道
- 1984 『パーリ仏教註釈文献の研究』東京: 山喜房仏書林.  
李鍾徹
- 2001a *The Tibetan Text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu.* Bibliotheca Indologica et  
Buddhologica 8. Tokyo: Sankibo Press.
- 2001b 『世親思想の研究——釈軌論を中心として——』. Bibliotheca Indologica et  
Buddhologica 9. 東京: 山喜房佛書林.

- <sup>1</sup> 『俱舍論』の縁起の語義解釈の議論については、加藤 [1989] が詳しく、筆者も楠本 [2001, 2007] においてすでに考察した。また、中観派の議論については、江島 [1985]、能仁 [1986, 1992]、永崎 [1999a, 1999b] 等が考察している。
- <sup>2</sup> Buddhaghosa の活躍年代について、森 [1984: 528-529] は、彼がスリランカに来島したのは「Mahānāma 王 (410-432プラス数年) の晩年頃、恐らく420年代の後半」であり、Vis が完成したのは「429年かそれ以前の事であった」と推測する。一方、Dhammapāla の活躍年代について、森 [1984: 537-538] は、従来の諸説では「5C. 後半期、或いは5C. 第四・四半期頃」、そして、1984年当時の説としては「Pieris は 6C. 後半 (または 7C. 初頭) としており、また Norman は多分 6C. 中頃ではないかと述べている」と言及する。また、近年の説として、水野 [1997: 185] は、Dhammapāla が「仏音よりやや後れて西紀五、六世紀に活躍したと思われる」と言及する。Dhammapāla の活躍年代については、学者によって解釈にばらつきがあることに注意しておきたい。
- <sup>3</sup> 馬場 [2003: 17] は、大寺派の縁起説についての近年の研究をまとめている。まず、‘paṭiccasamuppāda’の語義解釈を明らかにしたものに、浪花 [1991a, 1991b] の他に、松田(慎) [1980]、片山 [1992] の研究があり、さらに、Vis の縁起説を分析したものとしては、林寺 [1998]、浪花 [2000] の研究があると指摘する。本稿では、浪花 [1991a, 1991b] の研究を主に参照している。
- <sup>4</sup> まず、PSVy の梵文についてであるが、菅原・才川 [1990: 370] によれば、梵文断片が1本存在する。それを校訂したのが、Tucci [1930] である。これはTucci [1971] に再録されるが、室寺 [1986: 68] が指摘するように、Tucci [1971] にはミスが多く、Tucci [1930] の方が正確である。一方、VyY の梵文についてであるが、菅原・才川 [1990: 371] によれば、梵文は現存せず、楞伽経偈頌品での引用から数個の梵文を確認できるという。なお、VyY については、近年、李 [2001a, 2001b] の研究がある。今回の拙論を執筆するにあたり、浪花 [1991a, 1991b] と李 [2001a, 2001b] が大変有効であった。これらを踏まえた上で、PSVy を読むことによって、喩例が重複していることに気づくことができた。
- <sup>5</sup> この経典については、本庄目録 [3062] 参照。本庄 [1984: 42-43] によれば *Mānuṣyakasūtra* からの引用。また、本庄 [1992b] は、対応資料として、『雑阿含』13, 306-307 (T.2, 87c-88b) を挙げる。なお、この経典は AKBh だけでなく、PP や PrP でも引用されている。本稿では、AKBh の議論についてのみ挙げておくが、詳細については、楠本 [2007: 140ff., 269ff., 273ff.] を参照されたい。
- <sup>6</sup> 当該の Vis に対する Dhammapāla の復註はもっと前から始まっているが、今回扱いたいのは、VyY

と PSVy との関わりであるため、本稿で引用する Pm については p. 1180, ll. 10-14 の言及にとどめておく。

<sup>7</sup> Katre [1989: 327] は、Pāṇini 3.4.20 “parāvarayoge ca” について次のように説明する。“1. para: aprāpya nadīm parvataḥ sthitaḥ ‘the hill is on that side of the river’. 2. avara: atikramya tu parvataṃ nadī sthitā ‘the river lies beyond the hill’, i.e., the hill is situated on the side of the river, whereas in (a) the river is on the far side away from the hill.” さらに、辻 [1974: 307] は、「2. 副詞化或いは前置詞化した Absol.」の項目で、「aprāpya nadīm parvataḥ sthitaḥ ; atikramya tu parvataṃ nadī sthitā 川の手前に山がある、そして山の向うに川がある」と説明している。このことから明らかなように、この喩例は文法学派が使用するものである。なお、‘para’ とは「彼方のもの」を意味し、一方 ‘avara’ とは「こちらのもの」を意味するから、Katre [1989: 327] の ‘1. para’ 及び ‘2. avara’ という項目は ‘1. avara’ 及び ‘2. para’ に訂正し、また ‘the hill is on that side of the river’ という訳は ‘the hill is on this side of the river’ に訂正すべきである。ところで、Pāṇini 3.4.20 や 3.4.21 の規則については、広島大学の小川英世先生より御教示を賜った。大変感謝したい。だが、文法的内容理解に関して間違いがあれば、それは全て筆者の責任である。

<sup>8</sup> Katre [1989: 328] は、Pāṇini 3.4.21 について次のように説明する。“bhuj+Ktvā = bhuktvā vrajati ‘having eaten (= after eating) he goes’. This rule is applied even when there are more than two verbs having the same agent: snātvā pītvā bhuktvā vrajati ‘goes out after having bathed, drunk and eaten’.”

ここに言及される “bhuktvā vrajati” 及び “snātvā pītvā bhuktvā vrajati” という二つの喩例は、〈6-AKBh〉の喩例と大変似てはいるが、“snātvā bhunkte” という語形そのものについては言及されていない。さらに、Raghunāth & Śivadatta [1937: 261] には、“snātvā vrajati bhuktvā vrajati pītvā vrajati”, “snātvā bhuktvā pītvā vrajati”, あるいは “pītvā bhuktvā snātvā vrajati” 等の喩例は見られるが、〈6-AKBh〉の喩例は言及されていないことに注意したい。

<sup>9</sup> 松田(和) [1984, 1998] 参照。

<sup>10</sup> 楠本 [2007: 128-129] 参照。

<sup>11</sup> 注2参照。

<sup>12</sup> 楠本 [2007: 3-5] 参照。

<sup>13</sup> VyY 第四章の「大乘仏説論」については、本庄 [1990, 1992a] 参照。

<sup>14</sup> VyY では、「法性」や「隠没」による仏説論についての議論が展開されている。一方、南伝アビダルマの仏説論における「法性」について、馬場 [2008:213] は、「準正典である『導論』(Nettipakaraṇa) では「法と律」に「法性」を加えた定義を挙げている。…(省略)…。しかし、ブッダゴースは『導論』による定義を採用しないと指摘する。さらに、「隠没」について、馬場 [2008: 214] は、「それは過去に起こった出来事としてではなく、将来に起こりうる事態として論じられている」と言及する。これら二つの点に基づけば、Buddhaghosa は VyY の仏説論の理論を援用しているとは言えない。だが、Buddhaghosa が VyY の仏説論と重複するテーマを扱いつつも VyY とは違った方向へ議論を展開させているのは、裏返せば、彼が VyY をよく知っていたからなのではないかと筆者には思える。

<sup>15</sup> Buddhaghosa はインド本土で『解脱道論』を学んでいたと考えられることが水野 [1996: 81] によって指摘されている。水野 [1996: 81] : 「仏音は『清浄道論』を著すに当たってその骨格は『解脱道論』に依ったけれども細部および異点は大寺派の古註釈に従った。思うに仏音はスリランカに来る以前から既にインド本土において無畏山寺派の『解脱道論』を学んでいたのではないかと思われる。何となれば、彼はそのブッダガヤの有名な大菩提寺 (Mahābodhivihāra) で出家したものと考えられ、この寺にはスリランカ上座部の無畏山寺派 (大乘上座部) の比丘達に住んでいたとされるから、彼はこの寺で

この派の『解脱道論』を見る機会があったと考えられるからである」。なお、『解脱道論』が、拙論の結論で書いている「論書Z」なのではないかと筆者は考えてみたが、『解脱道論』は漢訳しか残されておらず、浪花〔2001〕を参照してみたところ、本稿で扱った縁起に関する喩例は全く見られなかった。縁起の議論については『解脱道論』以外に様々なアビダルマ文献との比較考察が今後必要である。

(くすもと のぶみち: 本学 非常勤講師)